

海幸山幸の中世神話考

——絵巻『かみよ物語』を中心に——

一、はじめに

いわゆる「海幸山幸神話」は、神武天皇の誕生にまつわる神話として、『古事記』上巻と『日本書紀』神代巻の最後に語られる。神話時代の最後と皇統の始発の分岐点に位置すること、また、神代では唯一独立した物語として絵巻化されたことから、その重要性が指摘できる話である。「海幸山幸神話」に取材する絵巻に『彦火々出見尊絵巻』と絵巻『かみよ物語（別称「玉井物語」）』がある。十一世紀後半、後白河院によって制作された『彦火々出見尊絵巻』は、『古事記』と『日本書紀』（以下「記紀」）の神話とは異なる、あらたな（中世日本紀）として、小川豊生氏等によって、早くから注目されてきたが、それに比べ、『かみよ物語』は今まであまり注意が払われてこなかった。『かみよ物語』は、『彦火々出見尊絵巻』とは別系統の絵巻で、新しい伝承を多く取り入れるなど、詞書と絵画において独自性が認められ、「海幸山幸神話」の展開を考える際には欠かせないテキストといえる。本稿で

は、『かみよ物語』を中心に、「海幸山幸神話」の中世の変容をたどりながら、中世における「海幸山幸神話」認識の変転について考えてみたい。

金 英 珠

◆物語の概要（『日本書紀』本文による）^②

海幸彦とよばれる兄と、山幸彦とよばれる弟（彦火々出見尊）は、ある日、お互いの幸を交換するが、二人とも何も獲ることができず、彦火々出見尊は兄の釣針を失くしてしまう。釣針を返すように兄に責められ、彦火々出見尊が海辺で嘆いていると、塩土老翁が現れて、海神宮に行く方法を教えてくれる。

海神の宮の門のところにある井で、海神の娘である豊玉姫に出会い、宮の中へと案内された尊は、釣針を取り戻し、豊玉姫と結婚する。三年後、故郷に戻る尊に、海神は、釣針と潮満瓊・潮潤瓊を差し出し、兄を降伏させる方法を教えてくれる。豊玉姫は、尊に妊娠を告げ、海辺に産屋を建てて待つように頼む。帰ってきた尊は、海神の教え通り、兄を服従させる。兄は弟に位を譲り、代々仕えることを誓う。今の吾田君小橋等は兄の

子孫である。出産のために海辺にやってきた豊玉姫は、お産の様子を見ないように尊に頼むが、尊は我慢できず覗いてしまう。すると、豊玉姫は龍の姿になっていた。豊玉姫は尊が約束を破ったことに怒り、生まれた子（ウガヤフキアエズ）をおいて、海路を閉じて帰ってしまい、妹の玉依姫が乳母として送られる。

ウガヤフキアエズは叔母である玉依姫と結婚し、イワレビコ（神武天皇）が生まれる。

二、絵巻の伝本

(一) 明通寺本『彦火々出見尊絵巻』

福井県明通寺に伝わる六軸の絵巻『彦火々出見尊絵巻』は、狩野種泰による一六五九年の模写本であるが、『看聞日記』の嘉吉元年（一四四一）四月十六日の条に、『彦火々出見尊絵巻』の原本と思われる絵巻が若州小浜の松永庄新八幡宮に在り、天皇への進覧のため、後崇光院がこの絵巻を借出したとの記述があり、共に小浜にあった『伴大納言絵巻』や『吉備大臣入唐絵巻』の人物表現との近似からも、その原本は、後白河院によって制作されたものと想定されている。後白河院の絵巻工房で制作されたことは、この絵巻を理解する重要な手がかりとなり、先行研究も、絵巻の政治性や後白河院の極楽往生への希求などに注目して『彦火々出見尊絵巻』の解説を試みるものが多い。⁵

『彦火々出見尊絵巻』と直接的な影響関係がある資料に、若狭神社所蔵『若狭彦若狭姫大明神秘密縁起』がある。若狭神社は、明通寺の近くに位置し、彦火々出見尊（若狭彦明神）と豊玉姫（若

狭姫）を祭神とする神社である。本縁起は、絵を伴うものではないが、所々にみられる本文表現の類似性から、『彦火々出見尊絵巻』を参考に作られたと推測され、その影響がみられる資料として注意される。

(二) 絵巻『かみよ物語』

現在確認できる『かみよ物語』の伝本は全七本で、外題と内題を欠くものが多く、書名が統一されていないが、本稿では、便宜上、『かみよ物語』に統一することにする。先行研究で指摘されている通り、これらの伝本は、詞書と画中詞において極めて異動が少なく、絵の表現においても非常に類似していることから、同じ祖本を持つ同系統の絵巻と考えられる。⁶

◆『かみよ物語』の伝本

- ① 西尾市岩瀬文庫蔵『かみ代物語』…絵巻一軸、外題・内題なし、室町時代。↓以下「岩瀬本」
- ② 個人蔵『かみよ物語』（思文閣旧蔵）…絵巻一軸、外題・内題なし、桃山時代。↓以下「旧思文閣本」
- ③ 大阪青山歴史文学博物館蔵『玉井乃物語』（赤木文庫旧蔵）…絵巻一軸、外題「玉井乃物語」、内題なし、江戸前期。↓以下「青山本」
- ④ 慶応義塾大学図書館蔵『彦火々出見尊草子』（赤木文庫旧蔵）…絵巻一軸、外題・内題なし、帰還後の画なし、江戸前期。↓以下「慶応本」
- ⑤ 大阪府茨木市磯良神社蔵『玉之井の縁起』…絵巻一軸、外題

「玉之井の縁起」、内題なし、江戸前期、画中詞少。↓以下「磯良本」

⑥加賀豊三朗氏旧蔵…全体の五分の一程度の残欠本、現在所在不明。

⑦杉本梁江堂目録掲載『龍宮城豊玉姫』…絵巻、現在所在不明。

三、中世の変容

(一) 塩土老翁の変転

①「海道案内者」から「帝道を塩梅する者」へ

記紀神話における塩土老翁は、海辺で嘆いている彦火々出見尊に、海神の宮へ行く方法を教えてくれる神として登場する。『かみよ物語』でも、塩土老翁は「面白くくみたるかご」で、彦火々出見尊を龍宮に行かせる案内者として出てくる。

此翁、のり物を、もちて候なり。「此くみかごにめして、海中へ、いらせたまはゞ、おほしめす所へ、さうなく、ゆかせたまふべし」。面白くくみたるかごを、とりいだして、まいらせければ、御子、なのめならず、よろこびたまふ事、かぎりなし。「我、龍宮にいたり、おもふま、ならば、なんぢを、かならず人になすべき」と、おほせあつて、すでに、龍宮に、おもむきたまふなり。

(『かみよ物語』)

弘安九年(一一八六)の奥書を持つ真福寺本『八幡大菩薩』(内題『八幡大菩薩御体事』)に「ワガカタニノリタマヘ」とあ

り、江戸中期の都の錦作『風流神代巻』には「手をとりにくみて、二人で海中に入る」とあるように、老人の肩に乗ったり、手を組んだりするなど、龍宮に向う方法には変化がみられるが、翁が海道の案内者であることに変わりはない。塩土老翁は「記紀」の「海幸山幸の段」につづく「神武東征の段」にも、海道の案内者として出てくる。海道を案内する翁神は、日本神話に多くみられるモチーフであり、出兵する神功皇后の前に現われる翁(住吉明神)は、その代表的な例といえる。

『大方便仏報恩経』『三宝絵』『三国伝記』などにみえる大施太子譚は、「貧しい民を救うために、如意宝珠を求めて龍宮に赴く」太子の話で、この話には、道を案内する盲目の翁が登場する。ところが、出典である『大方便仏報恩経』では、王の命によって強制的に太子の案内役にさせられ、途中で息絶える翁が、『三国伝記』では、どこからともなく現れ、「吾、龍宮、案内能知^リ。雖然、今、已^ニ盲目ナレバ御供、不^レ叶^ス」と道を教える展開に変わっている。これは、日本における翁神のイメージに影響された変化として注目される。

一方、『かみよ物語』の彦火々出見尊は、龍宮に向かう前、塩土老翁に「なんぢを、人になすべし」と約束する。実際、龍宮から帰ってきた尊は、自分が位を得て日本の主となったのは、翁の教えのおかげだと、「いかでか、おんを、ほうぜざるべき」と述べ、塩土老翁を内裏に呼んで、「つくしのうち、よき所、五か所まで」を下賜する。詞書のみでなく、塩土老翁が内裏で彦火々出見尊を謁見する場面も描かれる(図一)。塩土老翁の後ろには、文臣と武臣の服装をした人物が配置され、この場面は、帝と家臣



【図1】 塩土老翁、内裏で尊を謁見する場面「旧思文閣本」

釈書、一条兼良の『日本書紀纂疏』が、塩土老翁を「蓋_レ稟_ニ天命_ニ而塩梅_ニ帝道_ヲ者也」と解することに注目したい。天理本『日本書紀神代卷抄』（十六世紀）が『日本書紀纂疏』を引用しながら、「帝ヲタスクル者」と敷衍しているように、塩土老翁を帝の助力者に限定して説明するからである。「塩梅」を以って帝との関係を表す例は『日本書紀纂疏』以前にもみられる。建久本『北野天神縁起』に「其むかしをたずぬれば、文道の大祖、風

調さる、上下関係が強調されている印象が見受けられる。彦火々出見尊と出会う海辺の場面で、塩土老翁がひざまずく姿勢で描かれていることも、二人の間の上下関係を表すための演出のように思われる。このように、彦火々出見尊と塩土老翁を君臣関係とする認識は、「かみよ物語」の持つ特徴の一つである。それでは、なぜこのような伝承が生まれたのだろうか。一四五六年頃成立した日本紀注

月の本主なり。あるひは天下に塩梅として帝図を輔導し、或は天上に日月として、国土を照らし給へり」とあり、はやくも鎌倉前期からみえはじめる。大江匡衡が寛弘九年（一〇一二）に書いた祭文「北野天神供御幣并種々物_ニ文」にも、建久本『北野天神縁起』とほぼ同文がみられ、慶長八年古活字本『太平記』巻十二「大内裏造宮事付聖廟御事」にも「天_ニ御坐テハ日月_ニ顕光照国土、地_ニ降下テハ塩梅ノ臣ト成テ群生ヲ利シ玉フ」とある。塩土老翁の名前、そして、海道を案内するイメージが「帝道を塩梅する者」とリンクして、塩土老翁は「帝を助ける者」という新しい伝承が生まれたと思われる。

②塩作りの神

『かみよ物語』には、彦火々出見尊が龍宮へと出発する場面の次に、以下のような塩土老翁の説明が述べられる。

此しほつ、の翁と申は、我てうにて、しほを、やきいだしたる人なり。今せけん、上下ばんみん、しほをふくすれば、ふらうふしの、くすりとなつて、其あぢはい、すぐれたり。此翁、其のち、じゆみやう、かぎりなくして、いきながら、かみとなつて、しほつ、の明神とて、つくしに、今にあがめ給ふ。めでたく、ふしぎなりし事どもなり。（『かみよ物語』）

塩土老翁は「初めて塩を焼き出した人」であり、生きながら「塩土明神」となったと説く。塩土老翁を塩作りの神とする説は、『日本書紀纂疏』に「塩土翁ハ、則初_テ作_レ塩_ヲ之神_{ナリ}。塩煮_テ

海^ヲ為^スレ^ニ、此^ノ翁^ハ、伊弉諾尊之子、見^{タリ}レ^上とみえる。『日本書紀纂疏』は、天理本『日本書紀神代卷抄』や謡曲の注釈書『謡抄』（一六〇〇年前後）など、多くの注釈書に引用された。同説は、塩土老翁を祭神とする塩釜神社の由来譚にも語られ、塩土老翁を塩作りの神とする説が中世にひろく流布していたことがわかる。『風流神代卷』は、翁の名前が塩土老翁から「塩焼のおきな」に変わっており、時代が下ると、塩焼の神のイメージがますます強くなっていたことがうかがえる。

また、塩を「不老不死の薬である」と讃えていることも注意をひく。『かみよ物語』にしかみえない、人間である翁が、寿命が延びて生きながら明神となる話も、不老不死の薬である塩の靈験として説かれる。塩を不老不死の薬と見なす考え方はいつから現れるのか。平安末期成立の説話集『今昔物語集』には、出家した聖が「永く穀ヲ断チ塩ヲ断テ、山ノ菜・木ノ葉ヲ以テ食トシテ、法花経ヲ受ケ持テ」修業する話や、老嫗が「米・塩、及ビ菓子・雑菜等ヲ」僧に供養する話など、塩に言及する話が数話載っている。『宇治拾遺物語』には、「いと大なるまな板に、ながやかなる庖丁刀を具して置たり。めぐりには、酢、酒、塩入たる瓶どもなめりと見ゆる、あまた置たり」と、猿神の調理場の描写に塩が登場するが、いずれも、食べ物として扱われていることがわかる。米沢本『沙石集』（一二八三）には、塩売りにだまされる寺の坊主の話がある。寺の坊主は「まことに塩をば、熊野の道にも百味と云ひて、万の物の気味は塩にこそあれ」と、塩の大切さを述べ、塩を買い求める。しかし、塩十四・五俵が買える「上品の絹一疋」で、塩一俵を買ってしまう。塩売りの活動や、塩の価値を教えて

くれる興味深い話であるが、やはり調味料としての評価にとどまっている。

「塩焼文正」「塩売文正」と知られる御伽草子『文正草子』は、製塩業で富を得た文太の立身出世譚で、鹿島大明神に祈願して授かった二人の娘が、帝と関白殿の御子と結ばれる、めでたい話である。この『文正草子』には、文太の作った塩の効能が次のように述べられる。

▽ふんたがしほは、あぢはひもよく、かう人も、色しろく、このしほをくへば、やまいもなく、うれへもなし。

（慶應義塾図書館本『文正草子』）

▽此文太が塩と申すは、ころよくて、食ふ人病なく若くなり、また塩のあほさつもありもなく、三十層倍にもなりければ、やがて徳人になり給ふ。

（洪川版『文正そうし』）

伝本によつては、塩の効能の説明を欠くものもあるが、食べる」と「病がなくなり、若くなる」とする内容は、『かみよ物語』に説く塩の説明に近いもので注目される。このように、「薬としての塩」が語られるようになった背景には、本草学の影響が考えられる。『本草綱目』は、明の李時珍が書いた本草学書で、慶長十二年（一六〇七）日本に伝来すると、寛永十四年（一六三七）に最初の和刻本が出版され、後に十一種にのぼる版本が流布するようになり、近世を通して本草学の指針とされた書である。『本草綱目』第十一卷「石部」には「食塩」の条が設けられ、塩の種類や効能などが詳しく記されている。塩を「上は国家、宮廷の所用に供し、

下は人民個々の榮養の科となる」と説き、諸文献を引用しながら「風邪を除き、悪物を吐下し、虫を殺す」など、薬としての塩の効能を列挙する。そのなかに、「邪氣、一切の虫傷、瘡腫、火灼瘡に肉を長じ、皮膚を補ふ」と、皮膚における効能もあげられている。「多く食すれば顔の色沢を失ひ、皮膚を黒くし、筋力を損ずる」という害の説明からも、塩の美白効果が推測できる。『本草綱目』は基本的に、塩の利と害の両面を紹介しているが、「一斉で百人の病を救ふことが出来る」と説く「鍊塩黒丸」をはじめ、塩を使った治療法と効能を多く載せており、薬としての塩の側面が強調されている。塩を薬とする認識の広まりには、『本草綱目』の流布の影響が大きかったと思われる。

③まとめ

中世には、多様なジャンルの影響をうけ、塩土老翁に関する新しい伝承が生まれてくる。このような新しい伝承を物語の中に取り入れていることは、『かみよ物語』の特徴といえる。詞書には、「上下ばんみん、塩を食すれば、不老不死の薬となる」や、領地を与えられた翁を「うらやまぬ人はなかりけり」のように、読者を意識する表現が多く、新伝承の吸収に積極的な『かみよ物語』の姿勢は、読者意識にもつながっているといえるだろう。

(二) 井の場面をめぐる

①「井」と龍女

龍宮に到着した彦火々出見尊は、門のところにある井で、龍女の娘である豊玉姫に出会い、龍宮の中へと案内される。天理本『日

本書紀神代卷抄』が「門前ノ一好井ト云ハ、社ノ鳥居ト云是也。鳥居ト云ハ、トリハ戸也。居ハ井也。龍宮ヲ学ンテ、神社ニ立ル也」と、井は鳥居であると注を付けているように、井は神聖な領域への入口、境界を表す。井が龍宮の門に置かれ、豊玉姫に代表される仲介者の存在に出会う場として描写されるのは、まさに井の「境界性」と、内部に入るためには「仲介者」が必要であることを物語っているといえる。井や湖、滝壺などを通じて、異界へ渡る話が多く、そのなかでも、次の高麗太祖である王建の始祖神話は「海幸山幸神話」と類似点が多いことで注目される。

靈異。高麗之先、阿干康忠ト宅於松嶽南麓以居。其曾孫作帝建娶西海龍女王、又居於此。生四男一女。龍女於宅中掘井、常由井中往來西海。戒夫曰、「我将入井、慎勿見之」。作帝建、後、從窓隙窺之。龍女率女子至井辺、俱化爲黃龍、興雲入井。及還、責夫曰、「何負約爲。吾不得在此矣」。遂与女變爲龍、入井不還。太祖即位、追尊作帝建爲懿祖、龍女爲景獻王后、捨其宅爲広明寺。

『世宗実録』の地理誌・旧都開城留後司の条にみえるこの話は、作帝建という人が西海龍女の娘を娶る点、その間で生まれた子の子孫が高麗の始祖となる点、約束を破ったので、龍女が海に帰ってしまう点など、その展開が「海幸山幸神話」と非常に似通っていることがわかる。「龍女、宅中に井を掘りて、井の中より西海に往来す」とあるように、この話でも、井は龍宮への通路、しか



【図2】尊、井で姫君に出会う場面「岩瀬本」
 (『岩瀬文庫蔵奈良絵本・絵巻 解題目録』より転載)

も龍女だけが使える通路として登場する。これは、境界性ととも
 に、井と龍女の関連性を示すことでも興味深い¹⁶⁾。

『かみよ物語』は、その別称「玉井の物語」からもわかるよう
 に、井の場面がクローズアップされ、金の桶を持って水を汲む豊
 玉姫と玉依姫、二人の姫君が描かれている(図2)。井の場面
 はほかの伝承にもみえるが、二人の姫君が登場するのは「かみよ
 物語」の特長である。『かみよ物語』は、龍宮での宴会場面や尊
 が龍宮を去る場面、ウガヤフキアエズ出産の場面、最後の式三番
 の場面にも、彦火々出見尊と並んで二人の姫君が描かれ、全体を

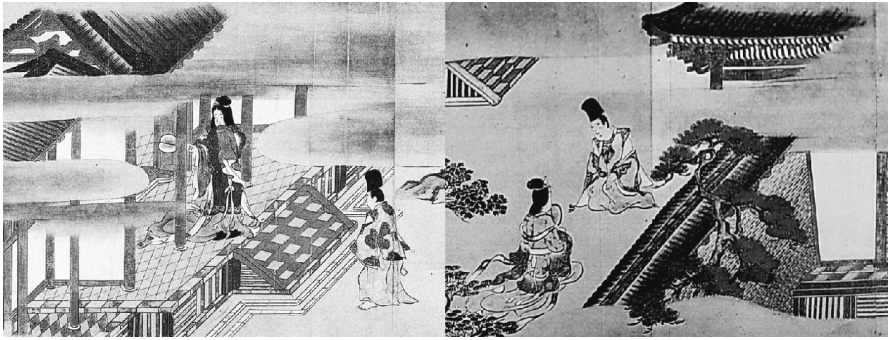
通して姫君たちの
 存在感が強調され
 ている。小林健二
 氏がすでに指摘し
 ているように、井
 の場面を含む二人
 の姫君をめぐる表
 現は、謡曲『玉井』
 と類似しており、
 芸能との影響がう
 かがえることでも
 注目すべき表現と
 いえる。
 その一方で、井
 が登場しない伝承
 もある。一三三九

年に書かれた『神皇正統記』は、龍宮入りの場面全部がカットさ
 れ、真福寺本『八幡大菩薩』と『風流神代巻』は違う表現に変
 わっている。真福寺本『八幡大菩薩』では、龍王と思われる老人
 の案内で龍宮に入るが、この伝承での豊玉姫が、「通ってくる」
 尊を待ち、また、出産のために龍宮へ帰ることを希望するも、尊
 に断られる存在として描かれることに注意しておきたい。物語に
 おける豊玉姫の比重が縮小され、彦火々出見尊の権威が強調され
 ているように思われるからである。一方、『風流神代巻』には、
 龍宮に着いて「門をたたくと、頭に伊勢海老の冠着たる官人出て、
 門をひらく」とあり、龍宮に入った尊を豊玉姫が迎えにくる。井
 の代わりに、閉ざされた門と官人が「境界性」と「仲介者」を表
 わしていると考えられる。

②『彦火々出見尊絵巻』の「玉の女」

井の場面が強調される『かみよ物語』に対し、『彦火々出見尊
 絵巻』には井のモチーフがみえない。尊は、次の詞書のように、
 「門のわきに立つ玉の女」を二回通り過ぎて、龍宮のなかに入る
 (【図3】)。

門の脇に、玉の女居たり。「汝は何人ぞ。この国の人にもあ
 らぬ人の、かく俄かに出で来たるは」と云ふ。尊、答へて曰
 く、「我は、葦原日本の御子なり」と云ひて、釣針の事の有
 様を、初めより語る。玉の女、聞きて、帰り入りぬ。出でて、
 門の中に入るべき由を云う。そのままに、中に入りて見れば、
 又中門あり。同じく、瑠璃を以て飾れり。輝き照る事、初め



【図3】 尊、玉の女に出会う場面『彦火々出見尊絵巻』
 (『彦火々出見尊絵巻の研究』より転載)

よりも十倍勝れり。同じく又、門の脇に、玉の女有り。その女も又、初めには勝れり。同じ様に問へば、初めの如くに答ふ。中に入るべき由を云う。(彦火々出見尊絵巻)

「玉の女」は「彦火々出見尊絵巻」にかみえないモチーフで、詞書には、その正体について何も記されていない。『若狭彦若狭姫大明神秘密縁起』は、本文内容の類似性から、「彦火々出見尊絵巻」との関連性が指摘されるものであるが、「玉の女」に該当する箇所は「金門脇ニ宝冠シタル女人、容顔

美麗ニシテ、天人モ覚哉ト巖ガ立給ヘリ」となっている。「容顔美麗」は「玉」を美称として理解した結果と思われ、縁起が著される段階では、「玉の女」が特定の意味を持つ語彙ではなかったことがうかがえる。ところが、前にもふれた「大施太子譚」にも、龍宮の「玉の女」が語られる。源為憲「三宝絵」上の「精進波羅蜜」には、龍宮に着いてみると「毒ノ竜堀キヲ守リ、玉ノ女門ヲ守ル。太子消息ヲ云ハシムレバ、竜王驚奇シム」とあり、「玉の女」は龍宮の門を守る者とする。この話の原典となる「大方便仏報恩経」には、より詳しい記述がみえる。

得至三城門下、見三玉女紡頰裂縷。太子問曰、「汝是何人」。答言、「我是龍王守外門婢」。問已前入到中門下。見四玉女紡白銀縷。太子復問、「汝是龍王婦耶」。答言、「非也」。是龍王守中門婢耳。太子問已。前入到内門所。見八玉女紡黃金縷。太子問曰、「汝是何人」。答言、「我是龍王守内門婢耳。太子語言、「汝爲我通大海龍王。閻浮提波羅奈王善友太子。故來相見、今在三門下」。時守門者、即白如是。(『大方便仏報恩経』卷三)

右は、龍宮に着いた太子が、門のところまで「玉の女」に出会う場面であるが、「玉の女」という表現だけでなく、訪問者と問答を行うことも、「彦火々出見尊絵巻」と非常に似ていることがわかる。「玉の女」が、門を守る者であり、訪問者と龍王の間で仲介役を果たしている点に注意したい。これらは、先に述べた井の場面が持つ性格、「境界性」と「仲介者」と一致するからである。

つまり、表現は異なるが、「玉の女」は「境界性」と「仲介者」を象徴するモチーフであり、井の場面に入れ替えられたのではないかと思われる。

それでは、このような変容が生まれた理由は何だろうか。稲本万里子氏が「龍王の娘は、魔性を失い、出産時まで宮殿の奥に隠され、龍王である父のいいつけに従う姫君として表わされる」と指摘するように、この入れ替えは、従順的な姫君を表現するための工夫と考えられる。従順的な姫君を作り上げるためには、井の場面を削除する必要があったが、一方、兄を服従させる力を手に入れる神聖な異界として、龍宮は異界の権威を保たなければならぬ。それで、井と同じ性格を持つ「玉の女」が描かれたと推測される。

③まとめ

仏教の伝来以後、その影響を受けて、海神は龍王、海神宮は龍宮へと代わっていく。「海幸山幸神話」も例外ではなく、『彦火々出見尊絵巻』の段階から龍宮・龍王の表現が用いられている。仏教における龍は、畜生道に属して、煩惱に悩まされる存在として説かれるが、一方では、十三世紀の『華嚴宗祖師絵伝』元暁伝にみえるように、龍宮は經典を収める場所であり、ヒルコをエビスとして再生させるごとく、聖なる異界としての機能を保っていた。「海幸山幸神話」にみられる龍宮への入り方は、井で出会った豊玉姫に案内されたり、玉の女に導かれたりするなど、複数のパターンが確認されるが、聖なる異界としての龍宮認識に基づくものが多く、「海幸山幸神話」における龍宮は時代が変わっても、神

聖性を保っていたことがうかがえる。

(三) 宝珠について

①「潮満瓊・潮潤瓊」から「満珠・干珠」へ

彦火々出見尊が持つて帰る、潮を操る宝珠の名称は「潮満瓊・潮潤瓊」から「満珠干珠」へと変わる。『神皇正統記』に「海神ヒル珠・ミツ珠ヲタテマツリテ、兄ヲシタガへ給ベキカタチヲオシヘ申ケリ」とあり、了誉の『日本書記私鈔』巻二にも「潮満瓊・潮潤瓊シホミツニシヲヒルニトハ今ノ世ヲ云ヒタル満珠干珠事也」とあるように、十四世紀以後のテキストには「満珠干珠」の用例が多く散見する。『日本書記私鈔』が、潮満瓊・潮潤瓊に「今の世に云い伝えたる満珠干珠」と注を付していることから、この注が付けられた段階では、「満珠干珠」の方が一般的に知られていたことを知ることができる。

では、世に知られていた「満珠干珠」はどういうものだったのか。一三〇〇年前後に成立した『釈日本紀』巻八「潮満瓊及潮潤瓊」条には、海幸山幸の宝珠と、神功皇后の三韓遠征を結び付ける記述がみえる。神功皇后の三韓遠征の時、新羅の宮廷に海潮が満ちたのは、この潮満瓊・潮潤瓊の力であるとし、皇后が海で如意宝珠を得たことを記している。しかし、『日本書紀』の仲哀天皇二年七月の条に、神功皇后が豊浦津の海中で如意宝珠を得た記事はあるが、三韓遠征との関係や、その靈験についての記述はみえない。『満珠干珠』伝承は、中世神話としての神功皇后神話に初めて現われる。神功皇后神話は、八幡信仰とともに広まり、『八幡愚童訓』などの八幡縁起類にはもちろん、多くのジャンルにも



【図4】潮乾玉を振る場面『彦火々出見尊絵巻』
（『彦火々出見尊絵巻の研究』より転載）



【図5】尊、龍宮を去る場面「岩瀬本」
（『岩瀬文庫蔵奈良絵本・絵巻 解題目録』より転載）

②宝珠の形と色

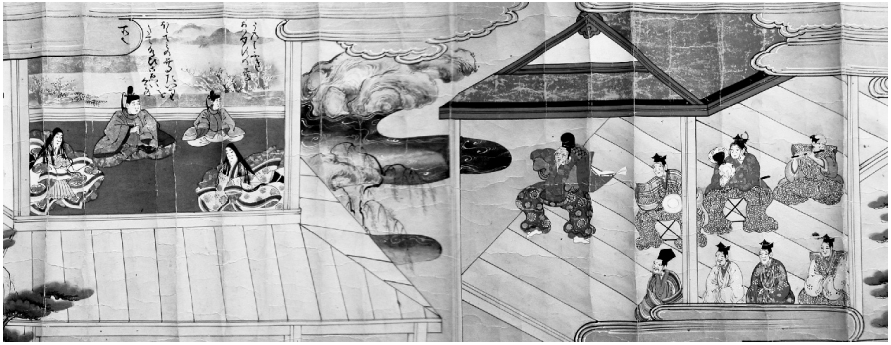
「記紀」をはじめ、海幸山幸神話を伝えるテキストには、宝珠の靈験のみが語られ、その形と色に関する記述はみえないが、『彦火々出見尊絵巻』と『かみよ物語』から、それを知ることができる。【図4】と【図5】は、各絵巻に描かれた「満珠干珠」であるが、双方が異なる表現になっていることがわかる。

『彦火々出見尊絵巻』の「満珠干珠」が薄い黄色であるのに対し、『かみよ物語』は、満珠は金色、干珠は銀色で彩色している（慶応本）は両方とも金色）。

ここで、『かみよ物語』の宝珠の表現について考えてみたい。観世信光作の謡曲『玉井』には、次のように、二人の姫君が「金銀の椀」に玉を備え持つ描写がみられるが、これは、釣針を持つ龍王も合わせ、【図5】の絵画と非常に近い表現で注目される。

〔天女二人が登場。一人はお盆に青い玉を、もう一人は銀の玉を乗せて、両手に奉げ持つ〕（天女二人）光散る、潮満玉のおのづから、曇らぬき影仰ぐなり。（地）おのおの玉を、奉げつつ、おのおの玉を奉げつつ、豊姫玉依、二人の姫宮、金銀椀裏に、玉を備へ、尊に奉げ、たてまつり、かの釣り針を、待ち給ふ。海洋の宮主、持参せよ。（謡曲『玉井』）

影響を及ぼした。その結果、満珠干珠の方が、より広く知られるようになったと思われる。由阿が著した『詞林采葉抄』巻四の渤海条には、神功皇后が妹の若多良姫を龍宮に遣わして「干珠満珠ヲ乞取テ」渤海に向かう話がみえ、慶長八年古活字本『太平記』巻四十「神功皇后攻、三新羅給事」にも「是ヲ御使ニテ、龍宮城ニ宝トスル干珠満珠ヲ被_ル借_リ召_サ」とあるように、「満珠干珠」は三韓遠征の際、使者が龍宮から借りてくる宝珠として語られる。



【図6】内裏で式三番が行なわれる場面「旧思文閣本」

また、最初に二人の姫が捧げて持つ「青」と「銀」の玉は、「八幡愚童訓」をはじめとする「八幡縁起類」に共通してみられる「乾珠は白珠、満珠は青珠」とする描写と一致する。「八幡縁起絵巻」の伝本は非常に多いが、なかには「かみよ物語」のように、お盆に「満珠干珠」を捧げ持つ絵が描かれる十四世紀の伝本もあることから、「八幡縁起絵巻」が「かみよ物語」に影響を与えた可能性も考えられる。

一方、「彦火々出見尊絵巻」は、宝珠の色や形のほか、宝珠の使い方も独自の表現がみられる。玉を「振る」という表現がそれである。龍王

は、宝珠を渡しながら、その使用法を「潮満玉を水に浸して、「潮満ちて来」と云ひて振れば、首に立ちて溺れ惑はむ折に、潮干玉を取り出でて、また「潮干よ」とて振らば、またもこのように、干きなん」と説明する。「海幸山幸神話」はもちろんで、神功皇后神話など、満珠干珠が登場するほとんどのテキストは、「玉を水に入れて」霊験を発揮させるが、「彦火々出見尊絵巻」と「若狭彦若狭姫大明神秘密縁起」では、「玉を振って」兄を服従させる。「鎮魂」を「タマフリ」と読むことを考慮すると、この表現は、兄に対する鎮魂の意味が込められているように思われる。小峯和明氏は、「後白河院の圏内で『伴大納言絵巻』と『吉備大臣入唐絵巻』という二つの絵巻が、一方は平安京を守護し、一方は海外の脅勢や畏怖から守り、ケガレを払う意義をそれぞれおびる、そういう御霊絵巻として作られた」と、御霊絵巻としての絵巻制作の可能性を提示しているが、同じく後白河院によって制作された『彦火々出見尊絵巻』に、鎮魂をうかがわせる表現がみられることは、絵巻の制作意図を考える上で注目すべき点といえる。

(四) 物語の結末

中世の「海幸山幸神話」は、彦火々出見尊が兄を服従させて、日本の国王になるストーリーは保ちながらも、位をゆずる過程における兄弟間の葛藤や兄との上下関係が示される後日譚はほとんど語られない。豊玉姫の出産場面における禁忌も消え、豊玉姫は出産の後も龍宮に帰ることなく、彦火々出見尊と一緒に暮らし、海路が塞がれることもない。このように、人物間の葛藤要素が排除され、彦火々出見尊の即位を順調な成行きで描くのは、中世の

「海幸山幸神話」が持つ特徴といえる。「記紀」神話では、隼人の服従譚が説かれるが、『彦火々出見尊絵巻』の兄の子孫は「吉野郡」に住み、季節ごとに贄を奉る。そして、それ以後のテキストには兄の後日譚がほとんどみられない。時代が下ると、兄の氏族の服従譚は、もはや意味を持たなくなってきたのであろう。『かみよ物語』は、葛藤のモチーフの削除だけでなく、前にあげた【図1】の「塩土老翁に領地を与える場面」や、【図6】の「ウガヤフキアエズの成人を祝う式三番の場面」など、めでたいモチーフが複数追加されており、他テキストよりも強い祝儀性をみせる。

そして、『かみよ物語』の結末部分には、異国・異界に関する大変興味深い記述がある。彦火々出見尊が位についた後、「りうきう、かうらい国まで、あひしたがひ、みつぎ物、たからをそなへ、しつちん万ばう、みちみてり」として、日本国内のみならず、流球と高麗からも貢物が送られてくる様子が述べられているのである。中世人の世界認識を知る資料として有名な金沢文庫本「日本図」（鎌倉末期成立）には、龍に囲まれた日本の国土に対し、その外側に、異国と異界が配置されているが、その外側に、高麗と龍及（流球）が一緒に描かれている。『かみよ物語』は、この金沢文庫の「日本図」と合わせて、中世の異国意識がみられる資料であり、中世の物語言説としては、きわめて例の少ない貴重なものといえる。

まとめ

以上、『かみよ物語』を中心に、海幸山幸神話の中世における

変容について考察してきた。『かみよ物語』は、海幸山幸神話のテキストのなかでも、絵巻として制作されたこと、また、改変の度合いが著しく、その独自の内容からも注目すべきテキストといえる。

阿部泰郎氏らの先行研究²⁴⁾で、中世の王権をささえる装置としての宝珠について論じられているように、中世は宝珠信仰が意味をもった時代であった。「海幸山幸神話」は、真福寺本「八幡大菩薩」で「皇帝の宝物である神璽之箱」の説明として述べられているように、「宝珠」と「王権」に関する神話として理解されてきた。『かみよ物語』は、この問題を引き継いで、新しい伝承を吸収し、さらには琉球や高麗に広がる、東アジアの世界観を視野に入れた、新しい王権神話としての海幸山幸神話の再創造であり、すなわち、「中世神話」として位置付けられるであろう。『かみよ物語』は、芸能との影響関係が想定されることでも興味深いテキストで、今後、謡曲「玉井」との比較検討がさらに必要と思われる。

『かみよ物語』と中世の「八幡縁起類」にみられる類似点も見逃せない。「満珠干珠」を媒介に、海幸山幸神話と神功皇后神話が、相互に影響し合いながら、展開されてきたことがうかがえるからである。本稿でとりあげた宝珠の描写のほかにも、「龍女の結婚」や「翁の舞」そして「鶴の羽で作る産屋」など、双方には共通のモチーフが多くみられ、二つの絵巻が「異国」と「王権」をめぐる神話であることも重要な共通点であり、『かみよ物語』と「八幡縁起類」とを、より重ねあわせて読んでいく必要があると思われる。

注

など。

(1) 小川豊生「中世日本紀の胎動―生成の(場)をめぐる」
 『日本文学』四十二・三、一九九三年三月、など。

(2) 「海幸山幸神話」は、「記紀」に全六つの伝承がみえる。

各伝承は、全体の概要(兄の釣針を無くした彦火々出見尊が海神の宮に行き、海神の教えによって兄を服従させ、豊玉姫と結婚してウガヤフキアエズを生む)は共通するが、登場人物の名前などにおいて、伝承間の相異がみられる。注意すべき異伝としては、①尊が海神の宮へ赴く際の乗り物が一尋鯉魚(『日本書紀』第四一書)、②井で出会う女性が豊玉姫の侍女(『日本書紀』第四一書)、③宝珠の名称が「塩盈珠・塩乾珠」(『古事記)、④兄を服従させる方法に宝珠が登場しない(『日本書紀』第一一書、などがある。

(3) 『看聞日記』六卷(宮内庁書陵部編『看聞日記』六卷、宮内庁書陵部、二〇〇二年)

(4) 小松茂美「彦火々出見尊絵巻の研究」(東京美術、一九七四年)、『彦火々出見尊絵巻・浦島明神縁起』(日本絵巻大成、中央公論社、一九七九年)

(5) 小川豊生前掲論文(注1)、『保立道久「彦火々出見尊絵巻」と御厨的世界―海幸・山幸神話の絵巻をめぐる』(『物語の中世・神話・説話・民話の歴史学』、東京大学出版会、一九九八年)、稲本万里子「描かれた出産―彦火々出見尊絵巻」の制作意図を読み解く」(『生育儀礼の歴史と文化―子供とジェンダー』森話社、二〇〇三年)、小峯和明「御霊信仰論―田楽と絵巻」(『院政期文学論』笠間書院、二〇〇六年)、

(6) 小林健二「特別寄稿「かみ代物語」の諸本と岩瀬文庫の位置」(石川透監修 阿部泰郎・阿部美香編『岩瀬文庫蔵奈良

絵本・絵巻 解題目録』二〇〇七年)、日冲敦子「大阪府茨木市磯良神社(世話方七軒)蔵「玉之井之縁起」絵巻について」(『伝承文学研究』六一、二〇一二年八月)

(7) 以下『かみよ物語』の詞書は「岩瀬本」による。但し、欠字・誤字は「青山本」によって補った。

(8) 『三国伝記』巻九の第四話「大施太子到テ龍宮ニ乞如意珠一事」

(9) 「天満大自在天神、或塩梅於天下、輔導一人」(思想体系『北野天神縁起』の補注による)

(10) 『今昔物語集』巻十二第四十話「金峰山薊嶽良算持経者語」

(11) 『今昔物語集』巻十五第五十一話「伊勢国飯高郡老嫗、往生語」

(12) 『宇治拾遺物語集』巻十の第六話「吾妻人生贅をとむる事」

(13) 『沙石集』巻第五本ノ七「学生ノ見ノ僻タル事」

(14) 増尾伸一郎「本草書・博物学と食」(『国文学解釈と鑑賞別冊「文学に描かれた日本の「食」のすがた 古代から江戸時代まで」至文堂、二〇一〇年十月)

(15) 『高麗史』(二四五二)にはより詳しい内容が載っているが、本稿では簡略な『世宗実録』(一四五四)の本文を用いる。『高麗史』所収の同話に関しては、森正人氏の論文「ア

ジアの龍宮伝承」(『説話・伝承学』二十、二〇一二年三月)がある。

(16) 『三国史記』「新羅本紀」赫居世居五年の条に「龍見於關英井、右脇誕生三女兒、老見而異之收養之、以三井名名之。及長有德容、始祖聞之、納以為妃」とあるように、新羅始祖の朴赫居世の后が、關英という井で龍から生まれたことから、井と龍女との関連性がうかがえる。

(17) 小林健二前掲論文(注6)

(18) 小松茂美『彦火々出見尊絵巻の研究』(注4)による。但し、本文の表記は私意により適宜改めた。

(19) 阿部泰郎『大織冠』の成立(『幸若舞曲研究』四、三弥井書店、一九八六年)にも指摘あり。

(20) 稲本万里子前掲論文(注5)

(21) 大問云、「此満瓊潤瓊二種在何処哉」。先師申云、「元歴之此、宇佐宮濫行之時、本宮注文満瓊潤瓊二種在当宮之由注進之。然則留宇佐宮歟」。重仰云、「神功皇后征伐三韓之時、新羅海潮満彼宮廷、若令持此瓊御歟。如何」。先師申云、「宇佐宮者、応神天皇、姫神、大帯姫(神功皇后)、三所鎮坐也。二種瓊已在当宮。皇后征伐三韓之時、就新羅海潮満宮廷思之、定令持此瓊御歟。然而無健所見。凡神功皇后者得如意宝珠於海中之由。見彼皇后祀耳」。

(22) 「其上忝竜女ノ身ナガラ人皇ノ后ト成ラン事、且ハ面目也トテ、二ノ玉ヲ奉ル。乾珠ト云ハ白珠、満珠ト云ハ青珠也」(『八幡愚童訓』甲本)、「さてかの二の玉をば、肥前国佐嘉

郡河上の宮に納をかれけりとなむ。早珠といふは白色の珠、満珠といふは青色の玉、おのく長五寸計の玉なり」(絵巻『石清水八幡宮縁起』)

(23) 小峯和明前掲論文(注5)

(24) 阿部泰郎「宝珠と王権―中世王権と密教儀礼―」(『岩波講座東洋思想第十六巻 日本思想二 岩波書店、一九八九年)、田中貴子「外法と愛法の中世」(砂子屋書房、一九九三年)、中尾堯「中世の勸進聖と舍利信仰」(吉川弘文館、二〇〇一年)、伊藤聡「重源と宝珠」(『中世天照大神信仰の研究』法蔵館、二〇一一年)、など。

使用テキスト

『大方便仏報恩経』(大正新修大蔵経第三巻『本縁部(上)』所収、一九六一年)

『日本書紀』(新編日本古典文学全集、小学館、一九九四年)

『三宝絵』(新日本古典文学大系、岩波書店、一九九七年)

『彦火々出見尊絵巻』(小松茂美『彦火々出見尊絵巻の研究』東京美術、一九七四年)

『北野天神縁起』(日本思想大系『寺社縁起』所収、岩波書店、一九七五年)

『三国史記』(韓国精神文化研究院編 『訳註三国史記』韓国精神文化研究院、一九九六年)

『宇治拾遺物語』(日本古典文学大系、岩波書店、一九九六年)

『今昔物語集』(新日本古典文学大系、岩波書店、一九九三年) 一九九九年)

『釈日本紀』（国史大系『日本書紀私記・釈日本紀・日本逸史』所収、一九九九年）

『沙石集』（新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇一年）

『八幡大菩薩』（真福寺善本叢刊・国文学研究資料館編七・神祇部二『中世日本紀集』所収、臨川書店、一九九九年）

『神皇正統記』（日本古典大系、岩波書店、一九六五年）

『世宗実録』（太白山本『朝鮮王朝実録』国史編纂委員会）

『日本書記私鈔』（内閣文庫本『日本書記私鈔』）

『日本書紀纂疏』（神道大系『日本書紀注釈（中）』一九八五年）

『太平記』（日本古典文学大系『太平記』岩波書店、一九六〇年）

『看聞日記』（宮内庁書陵部編『看聞日記』宮内庁書陵部、二〇〇二年）

『三国伝記』（中世の文学『三国伝記』、三弥井書店、一九七六年）

『日本書紀神代卷抄』（神道大系『日本書紀注釈（下）』一九八八年）

『若狭彦若狭姫大明神秘密縁起』（小松茂美『彦火々出見尊縁巻の研究』東京美術、一九七四年）

『かみよ物語』（『室町時代物語集（五）』所収、一九六二年、石川透監修、阿部泰郎・阿部美香編『岩瀬文庫蔵奈良絵本・絵巻 解題目録』二〇〇七年）

『玉井』（日本古典文学大系『謡曲集（下）』所収、岩波書店、一九六三年）

『文正草子』（岩波文庫『御伽草子（上）』二〇〇四年。『室町時代物語大成（十二）』、一九八四年）

『本草綱目』（『新注校定 国訳本草綱目』春陽堂書店、一九七九

年）

『風流神代卷』（古典文庫、一九七六年）

本稿は、二〇一二年度中世文学会春季大会（於・中央大学）での研究発表に基づくものです。御教示を賜りました先生方、また資料の調査・閲覧に際し、御高配下さった諸機関の皆様、先生方に心より御礼申し上げます。

（きむ・よんじゅ 大学院後期課程在學生）